

★平和におびえる強硬派 米朝首脳会談に衝撃

シンガポールでの米朝首脳会談。長期の敵対関係を終わらせ、平和の方向に転換させた歴史的な出来事だった。トランプ嫌いを含め米国民の 51~55%が合意を支持した。会談を仲介した韓国の文大統領の支持が 8 割近くに上昇し、与党は統一地方選挙でも圧勝した。

それなのに、多くのマスコミや「専門家」たちの評価は低い。「非核化」の約束に「具体策がない」「完全で検証可能、非可逆的な (C V I D) の文言がない」とネガティブ評価を連ねている。確かに非核化のプロセスは複雑で、今後の実務交渉には困難が予想される。トップ同士の合意を前にすすめる世論の後押しが必要だ。

それにしても北朝鮮の脅威を声だかに煽ってきた右派や強硬派たちの狼狽ぶりはどうだろう。非核化の保障がないままトランプ大統領が前のめりで譲歩と和解をすすめてしまった。おかげで米日、米韓同盟が危うくなったと大騒ぎをしている。

彼らが衝撃をうけているのは、トランプ大統領が首脳会談後の記者会見で、米韓合同演習の中止と将来的な在韓米軍の撤退の希望を表明したことだ。大統領は合同演習を「挑発的な戦争ゲームだ」と北朝鮮が使う同じ言葉で表現し、「私は好きではない」と言い切った。米紙によるとこの発言は関係方面との相談なしに「同盟国の意表を突き」「ペンタゴンの虚をついて」行われた。

ワシントンでは政府当局者が大慌てで調整に走り回っているという。結果、8月に予定される定例の米韓演習「乙支 (ウルチ) フリーダムガーディアン」の中止が発表された。韓国の保守勢力を代表する朝鮮日報は「軍事演習をやらない軍事同盟はかならず弱体化する」「韓国の安保はどうなるか」と連日社説を掲載し、危機感を露わにしている。

日本政府や右派勢力の動揺も隠しようがない。産経新聞は、在韓米軍と演習は日本の安全にとっても役割をになうから「米政府に翻意を働きかけよ」と主張 (15日付社説)。小野寺防衛相は「米韓の合同演習、あるいは日米韓の共同訓練を含む日米韓の 3か国の安全保障・防衛協力は、地域の平和と安定を確保していくうえで重要な柱と考えている」と懸念を表明した (15日)。

「在韓米軍の撤退は絶対にいってはならないこと。韓国の軍事境界線が対馬海峡になるということで、日本の安全保障にとって計りしれない危機だ」「目と耳を疑った。米国自ら将棋の駒を捨てたような行動だ」。韓国紙の東京特派員は日本の政治家、軍事専門家のこうした反応を紹介しつつ「トランプ発言で日本も安保パニックに陥っている」と報じている。

トランプ大統領が一夜にして「平和の天使」に変わったわけではない。中東や

中南米での軍事行動や干渉主義は変わらないし、在日米軍基地の強化の動きもかわらない。それなのに朝鮮半島の「平和」におびえる強硬派の懸念はどうだろう。軍事同盟以外に安保を考えられない軍事オタクの扇動にまどわされてはならない。(田中靖宏) (6月15日 平和新聞)